

## スリットによる波浪の減衰 第2報

大阪工業大学 正員 久保弘一  
大阪工業大学 正員 井田康夫

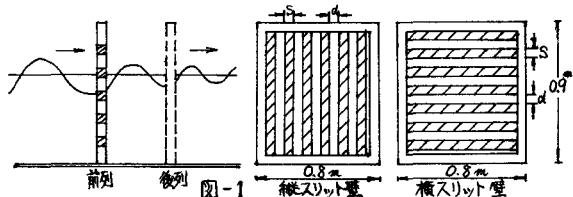
### 1. まえがき

最近、防波堤、波除堤、岸壁等で用いられているスリット式透過構造物はまだ実例が少なくて、かつ構造物の特性が波浪の減衰に与える影響もまだ充分、解明されていない。そこでこの報告は縦・横の基本的スリットを対象として波高の伝達率、反射率を求め、その水理特性を把握と共に、複列のスリット壁による波浪減衰効果にも言及したい。

すなわち、入射波高を  $H_I$ 、伝達波高を  $H_T$ 、反射波高を  $H_R$  とするとき、 $H_T^2 + H_R^2 = H_I^2$  また、伝達率  $K_T (= H_T / H_I)$ 、反射率  $K_R (= H_R / H_I)$  およびエネルギー保存係数  $K_C$  を導入すると  $K_T^2 + K_R^2 = K_C^2$  となる。つまり、 $K_T$  の小さい方が良いが構造物の目的によつては  $K_R$  が過大になっても不都合であり、 $K_C$  の小さい方がより望ましい。

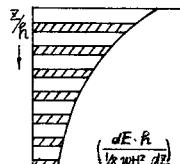
### 2. 実験設備および方法

実験は幅 0.8m、高さ 0.9m、長さ 27m の、一端にフラップ型造波機を持つ波浪水槽で行い、造波機より約 16m の位置に図-1 に示すような状態に表-1 の单、複列のスリット構造物を設け、表-2 に示す波を作成させ、スリット壁前後に設けた抵抗線式波高計で伝達波、反射波を測定し、 $K_T$ 、 $K_R$  を求めた。なお入射波としてはスリット壁設置前の同位置の波高を用い、反射率の算定はヒーリーの方法によつた。



スリット壁の種類	単列		複列	
	縦	横	横スリット壁+不透過壁	横スリット壁+縦スリット壁
しゃい横幅 dm	2, 3, 4		4	不透過
スリット幅 Sm	1, 2, 3, 4		1.3	透過
スリット比 %	1/2, 1/3, 1/4, 1/5		半音	半音
空隙率 %	0.158~0.543		1/2, 1/3	1/2

表-1 構造物の諸元



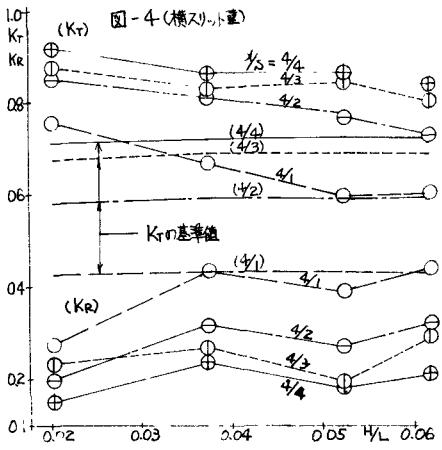
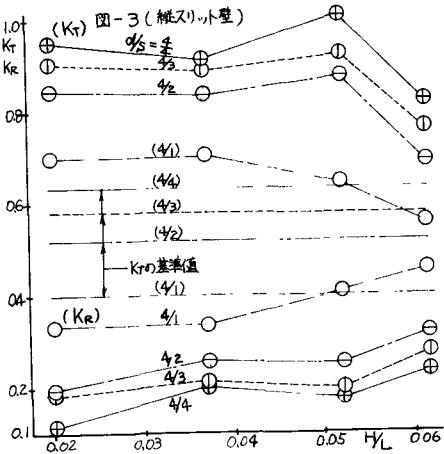
水深 H cm	50
周期 T sec	1.5~2.0
波長 L cm	283~393
波高 H cm	7.9~17.5
波形勾配 H/L	0.020, 0.037, 0.052, 0.064

表-2 波の諸元

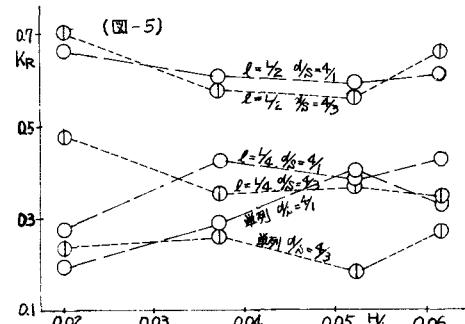
実験によって得られた  $K_T$ 、 $K_R$  を評価する際の 1 つの指標として 図-2 のように横スリット壁の場合、浅海波におけるある  $L$  に対応する波のエネルギー鉛直分布図の全面積に対するスリット部の面積の割合(%)を図から求め、 $K_T = \sqrt{S}$  を基準値とした。縦スリットの場合は  $K_T = \sqrt{A}$  に等しい。また  $K_R$  は  $K_R = \sqrt{1 - K_T^2}$  で表すことができる。(1) 单列 (a) 縦スリット壁 縦軸に  $K_T$ 、 $K_R$ 、横軸に  $L$  をとり、 $S$  をパラメータに示したもののが図-3 である。これらより  $K_T$  は  $L$  の小さい範囲ではほぼ一定であるが  $L = 0.04 \sim 0.05$  附近から減少傾向を示す。また基準値の 1.4~1.8 倍になっている。次に  $K_R$  は  $L$  が大きくなるにつれて次第に増加する傾向を示すが基準値の  $1/4 \sim 1/2$  程度である。

(b) 横スリット壁 縦スリット壁と同様の整理を行い、図-4 にその例を示す。これらより  $K_T$  は  $L$  の増大につれて減少し、かつ基準値の 1.1~1.3 倍位であり、 $K_R$  は  $L$  の増加に比例して大きくなる。ここで同条件における両スリット壁を比較すると  $K_T$ 、 $K_R$  とも横スリット壁

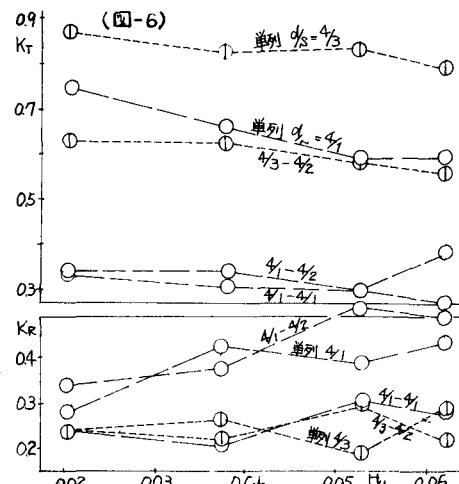
の方が小さく、  
波浪減衰効果は  
優れていますと言  
える。これは水  
面付近の大きさ  
エネルギーをそ  
の部分のしゃへ  
い板で適切かつ  
効果的に反射さ  
せておいたためで  
ある。



(2)複列 (a)横スリット壁と不透過壁 横スリット壁と不透過壁を組合せ、壁間の波の挙動に大きな差異が生ずると見られる壁間隔  $l$  を  $1/2$  と  $1/4$  にこれらを設置した。図-5より単列横スリット壁の  $K_r$  が  $H_L$  の増大に伴って大きくなつたのに対し、 $l = 1/2, 1/4$  逆に減少の傾向を示す。もちろん後列の不透過壁のため、 $K_r$  は大きくなるが  $l = 1/2$  よりも  $1/4$  の方が著しく小さく、单列よりも  $K_r$  が小さい場合さえ見られる。これは  $l = 1/2$  の時、連続波の間で波の位相がずれないのに対し、 $1/4$  では位相のずれによる効果が顕著に表れたものと考えられる。



(b)横スリット壁と縦スリット壁 後列に縦スリット壁を配し、波の位相差が期待される  $l = 1/4$  において  $K_r$ 、 $K_{Rt}$  を求めたのが図-6である。図から单列横スリット壁が  $H_L$  の増大に比例して  $K_r$  は減少するのに対し、 $H_L$  が  $K_{Rt}$  におよぼす影響は少なく、その値も小さい。



また  $K_{Rt}$  は单列横スリット壁と同様、 $H_L$  の増大に伴って大きくなるが、これらの複列スリット壁の  $K_{Rt}$  は前列のスリットの特性が支配的であり、後列のスリットの特性が  $K_{Rt}$  に与える影響は少ないと。

#### 4. あとがき

以上で、縦、横スリット壁およびこれらの複合スリット壁について若干の水理特性を得たが、 $K_r$  の測定に際し、構造物前面の  $H_{max}$ 、 $H_{min}$  を正確に捕捉できていない点もあり、 $K_r$  が全般的に過小と思われるるので、今後、応用的なスリット構造物の実験とあわせ、この点を確認したい。参考文献 (1)樋木・岩田・森永：横スリット防波堤の水理特性について(1)

(2)樋木・岩田：遮蔽性構造物による波の变形について